帰国生クラスに対する肯定度と意識／イメージの検討
―受け入れ形態による差異に着目して―

岡村　郁子

1. 研究背景

学齢期の子どもを伴う海外生活から帰国した際、まず直面するのは学校選択の問題であろう。帰国生の受け入れには様々な形態があり、カリキュラムや教育方針も多様であるため、それぞれのニーズに合った学校を選ぶことは非常に重要である。

しかし、これまでの研究は「適応」という観点から個人の問題に焦点を当てたものが多い反面、帰国生教育を「受け入れ側の問題」と捉える視点に立つ研究が少なく、特に受け入れ形態による差異についてはほとんど問われてこなかった。また、受け入れ形態の一つである「帰国生クラス」についての生徒からの生の声を反映した研究は管見の限り見当たらず、その存在意義や受け入れにおける効果は明らかになっていない。さらに最近では従来の帰国生クラスを廃止して一般混入とする学校が増える傾向にあるが、それが帰国生の実情に即したものであるかは定かではなく、検証を要するところである。

2. 先行研究

「受け入れ側の問題」に着目した研究として佐藤（1989）は、「潜在的カリキュラム」という概念を用いて、学校やクラスにおけるさまざまな圧力が目に見えないカリキュラムとして帰国生に働きかけている可能性を指摘している。また岡村・加賀美（2006）では、帰国生へのインタビュー調査とフィールドワークの結果、帰国生クラス在籍者が「ぬるま湯的緊張感のなさ」を感じて閉塞感に陥っている一方、一般混入された帰国生は学校生活に大きな問題を感じていないなど、受け入れ形態により大きな差異があることが示唆された。さらに岡村（2008）は帰国生の「受け入れクラスに対する意識」を抽出し、受け入れ形態や属性によるクラス意識の差異を検討したところ、特に一般混入クラスにおける個人差が大きく、日本語運用力の低い生徒はすべてのクラス意識が低いという問題が明らかになった。

3. 研究目的と課題

本研究は、帰国中学生の「帰国生クラス」に対する肯定度を受け入れ形態別（帰国生クラス・一般生混入クラス・1年次の帰国生クラスを経て2年次以降一般生混入、の3タイプ）に分析するとともに、具体的な自由記述による「帰国生クラス」に対する意識／イメージ[注1]の分析を通して「帰国生クラス」の存在意義を明らかにし、帰国時の受け入れ形態選択の際の一助と為すことを目指すものである。

研究課題として以下の2点を定めた。

＜研究1＞「帰国生クラス」に対する肯定度には受け入れ形態別で差異があるか。

＜研究2＞自由記述にみられる帰国生クラスや一般生混入クラスへの意識／イメージにはどのようなものがあるか。またそれは受け入れ形態により差異があるか。

・2－1　帰国生クラスに対する意識／イメージは受け入れ形態によりどのような差異があるか。

・2－2　一般混入クラスにおける帰国生の困難にはどのようなものがあるか。それは帰国生クラスに対するイメージと関連があるか。

4. 研究方法

2006年7月実施の質問紙調査による。調査対象は都内帰国生受け入れ中学校8校（国公私立）に在籍する帰国生387名、うち321名より回収し、回収率は83％であった。＜研究1＞については、岡村・加賀美（2006）により抽出された「帰国生クラスに対する肯定度」を問う質問項目（5項目）[注2]への回答の平均値を算出し、統計パッケージSPSSを用いて受け入れ形態別に分散分析を行い、有意差の見られた項目については多重比較を行った。

＜研究2＞については、同じ質問紙中の「帰国生クラスについて感じていること」・「一般生と同じクラスに入って困ったこと」についての自由記述を

KJ 法によりコーディングないしカテゴリー化を行い、質的な分析を試みた。

5. 研究結果

5.1. 帰国生クラスに対する肯定度

帰国生クラスに対する肯定度を受け入れ形態別に比較するため一元配置の分散分析を行ったところ、帰国生クラス・一般混入クラス・帰国生クラス後一般混入の間ですべて 0.1%水準の高い有意差が認められた。さらに多重比較の結果、帰国生クラスに対する意識／イメージを問う各項目において＜表１＞に示すような差異があることが明らかになった。

＜表１＞受け入れ形態別　帰国クラス肯定度の分散分析　　（　）＝標準偏差　*p<.05, **p<.01, ***p<.001

	Ⅰ帰国生クラス (N=174)	Ⅱ一般混入クラス(N=100)	Ⅲ帰国生クラス後一般混入 (N=42)	F 値	多重比較 *p<.05,**p<.01,***p<.001
①日本の学校生活に慣れるのに役立つ	3.36 (1.08)	2.73 (1.17)	3.71 (1.29)	14.1***	Ⅰ(3.36)＞Ⅱ(2.73) *** Ⅲ(3.71)＞Ⅱ(2.73) ***
②気楽でのびのびしている	3.98 (1.08)	2.66 (1.28)	4.00 (1.19)	44.0***	Ⅰ(3.98)＞Ⅱ(2.66) *** Ⅲ(4.00)＞Ⅱ(2.66) ***
③帰国生の友人は付き合いやすい	3.94 (1.05)	2.83 (1.25)	3.45 (1.33)	29.6***	Ⅰ(3.94)＞Ⅱ(2.83) *** Ⅲ(3.45)＞Ⅱ(2.83) *
④帰国生クラスに入りたい	3.74 (1.22)	2.58 (1.26)	3.13 (1.44)	27.3***	Ⅰ(3.74)＞Ⅱ(2.58) *** Ⅰ(3.74)＞Ⅲ(3.13) *
⑤帰国生クラスは楽しい	3.82 (1.10)	2.19 (1.09)	2.71 (1.31)	70.9***	Ⅰ(3.82)＞Ⅱ(2.19) *** Ⅰ(3.82)＞Ⅲ(2.71) *** Ⅲ(2.71)＞Ⅱ(2.19) *

設問①②では、帰国生クラス・帰国生クラス後一般混入ともに、一般混入クラスよりも高い肯定度が示された。またこれら２問においては、帰国生クラス後一般混入の点数が帰国生クラスを上回っていることから、帰国生クラスを出てからの方がこれらのメリットをより高く評価していることがわかる。

設問④⑤においても同様の結果であったが、帰国生クラス後一般混入における肯定度は帰国生クラスのそれを有意に下回っており、帰国生クラスを経て混入クラスに入った生徒は、帰国生クラスの生徒ほどは帰国生クラスにいる必要性を感じていないことがわかる。すなわち、帰国生クラス後一般混入の生徒では帰国生クラスのよさを認めながらも、一般混入クラスに入った現在ではそのよさも感じていることが示されたといえよう。

なお、設問⑤の「帰国生クラスは楽しい」については３形態すべての間に有意差がみられ、帰国生クラス在籍者・帰国生クラス後一般混入・一般混入クラスの順に、肯定度が高かった。

5.2. 帰国生クラスに対する意識/イメージについて

5.2.1. 帰国生クラスに対する意識/イメージの受け入れ形態別の差異

自由記述では次ページの＜図１～３＞に示すような帰国生クラスに対する意識/イメージが抽出された。以下、受け入れ形態別の分析結果を述べる。

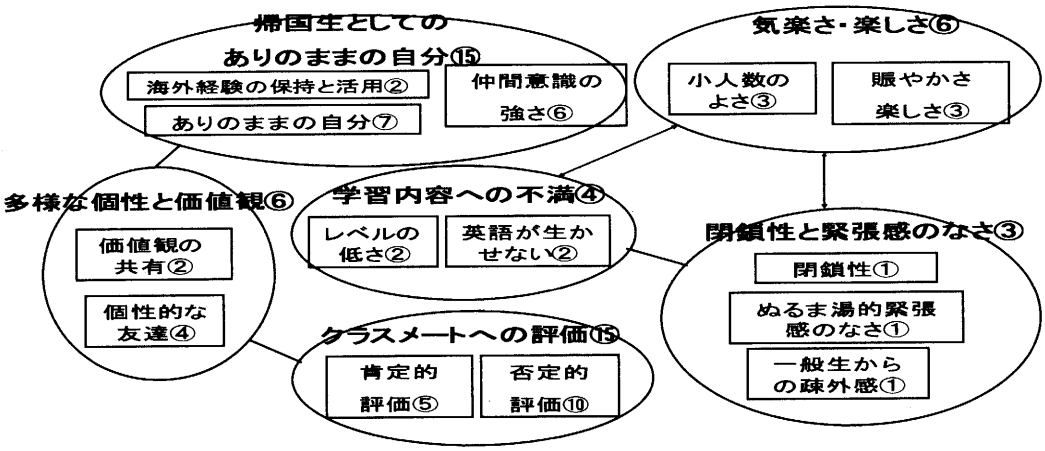
①帰国生クラス

最も多くコメントされたのは「帰国生としてありのままの自分（15：数字はコメント数、以下同様)」であり、「多様な個性と価値観」・「気楽さ・楽しさ」などと併せて肯定的なコメントが全体の７割近くを占めた。否定的なコメントとしては「閉鎖性と緊張感のなさ」「学習内容への不満」などが挙げられた。また「クラスメートへの評価」として肯定（5)・否定（10）のコメントを得たが、このカテゴリーは他の受け入れ形態にはみられないものであり、帰国生クラスでは少人数の狭いクラス内だけに視点が向いている可能性も窺われる。

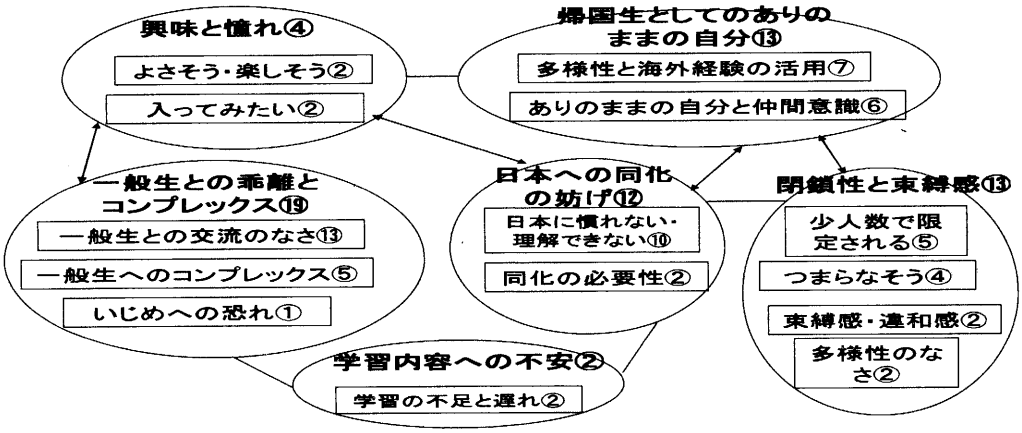
②一般混入クラス

ここでは「一般生との乖離とコンプレックス（19)」、「閉鎖性と多様性の欠如（13)」、「日本への同化の妨げ（12)」といった否定的イメージが多数を占め、「帰国生としてのありのままの自分（13)」、「興味と憧れ（4)」などの肯定意見をはるかに上回った。帰国生クラス在籍者では「一般生との乖離とコンプレックス」を示すコメントはわずか１件であったのに対し、一般混入では総数の３割を占めている点に注目すべきであろう。日常的に一般生と接している一般混入形態の帰国生にとっては、「帰国生だけが集まるクラス」のイメージは即ち「一般生と

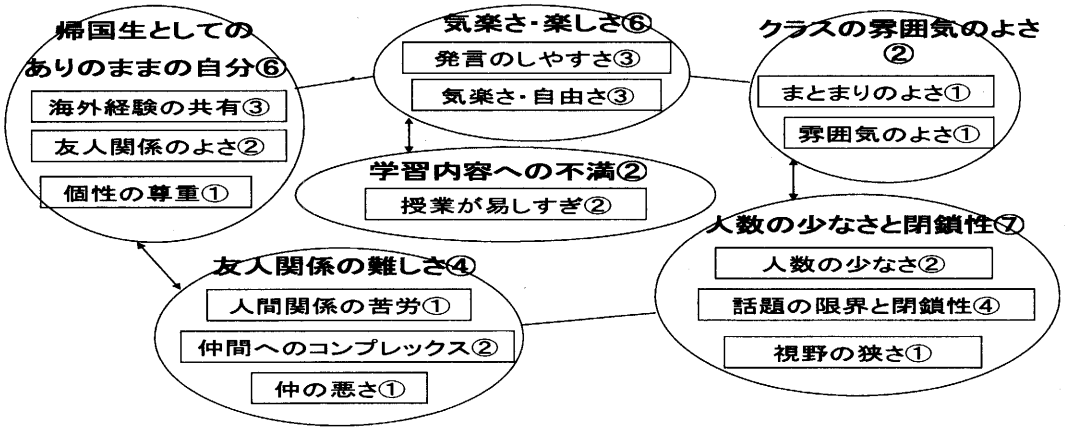
の乖離」を意味しており、否定的なものとなってい　ると考えられる。



＜図1＞　帰国生クラスに対する意識（帰国生クラス在籍者）



＜図２＞帰国生クラスに対するイメージ（一般混入クラス在籍者）



＜図３＞　帰国生クラスに対する意識
（帰国生クラスを経て一般混入クラス在籍者）

③帰国生クラス後一般混入

この形態では、「帰国生としてのありのままの自分（6）」・「クラスの雰囲気のよさ（2）」などのプラス面を評価するコメントと、「学習内容への不満（2）」・「人数の少なさと閉鎖性」などのマイナス面を指摘するコメントをほぼ同数みることができる。また「気楽さ・楽しさ（6）」とうらはらに「友人関係の難しさ（4）」を挙げる生徒もおり、帰国生クラスの良い面も悪い面もそれぞれ見極めているのがこの受け入れ形態の特徴であるといえよう。

5.2.2. 一般混入クラスにおける帰国生の困難

一般混入クラス在籍する帰国生が「困ったこと」として挙げたのは「学習レベルの高さ（22）」が最も多く、「緊張感と不自由さ（13）」「違和感・不適応感（12）」が続く。その他、「人数の多さ」「海外体験の封印」「いじめ・からかい」などのコメントも見られた。かつて帰国生いじめが大きな問題となった頃ほどではないにせよ、このような事態が現在もみられることに変わりはない。自由記述にみられるこうしたコメントにも注目すべきである。

6. 考察

＜研究 1＞の結果から帰国生は帰国後自分の在籍しているクラスを概して肯定的に受け止めていることが明らかになった。しかしながら＜研究 2＞で分析した自由記述の結果からは、一概にそう断定してはならない状況が浮かび上がってくる。

帰国生クラスでは、「気楽で楽しい」雰囲気の中で「帰国生としてのありのままの自分」を発揮して、クラス内での「多様な個性と価値観」を認め合う一方、「閉鎖性と緊張感のなさ」や「クラスメートへの否定的評価」「学習内容への不満」を抱えていることが示された。これは、帰国生クラスの閉鎖性やぬるま湯的緊張感のなさを指摘した岡村・加賀美（2006）の結果を裏付けるものである。

一方、一般混入クラスの帰国生は、帰国生であるがゆえの「違和感・不適応感」や「学習レベルの高さ」に悩みつつ、「一般生との乖離」を避けるために「海外経験を封印」して内外からの「同化」要請に応えようとしていることが明らかになった。

一般生クラスにおいてさまざまな困難を抱えながらも、帰国生クラスに対しては否定的なイメージをより多く抱いていることから、内外からの同化へのプレッシャーや、先に述べた「潜在的カリキュラム」が媒介していることが考えられる。

7. 今後の課題

本研究の結果から一般混入クラスにおける「潜在的カリキュラム」の存在を窺うことができたが、帰国生クラスにおいても「ぬるま湯的緊張感のなさ」につながる別の潜在的プログラムが作用している可能性があり、今後はこの点についてフィールドワークを含めてさらに詳しく検討する必要がある。

また、本研究で扱わなかった一般混入クラス在籍者の「一般クラスに対する肯定的意識」と、帰国生クラス在籍者の「一般混入クラスのイメージ」を明らかにし、帰国生のよりよい受け入れ形態について模索したいと考えている。

注

1. 帰国生クラス在籍者には帰国生クラスへの「意識」、一般混入クラス在籍者には「イメージ」を聞いた。
2. 「①日本の学校生活に慣れるのに役立つ」「②気楽でのびのびしている」「③帰国生の友達は付き合いやすい」「④帰国生クラスに入りたい」「⑤帰国生クラスは楽しい」、の5点について、いずれの受け入れ形態でも同じ内容を尋ねられるような質問項目を設定した。

参照文献

岡村郁子（2008）「帰国生の受け入れクラスに対する意識—受け入れ形態の差異に着目して」異文化間教育学会編『異文化間教育』第28号　<印刷中>

岡村郁子・加賀美登美代（2006）「帰国生の受け入れにおける学校コミュニティの役割—取り出し・少人数授業に関する一考察」『日本コミュニティ心理学会第9回大会論文集』

お茶の水女子大学附属中学校（1998）「帰国生はこうして学ぶ—在外学習歴を生かした学習指導のあり方」第4回海外子女教育研究協議会

佐藤郡衛（1989）「帰国子女の受け入れに関する社会学的研究—潜在的カリキュラム論によるアプローチ」『東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要』15号

佐藤郡衛（1995）『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版

東京学芸大学附属大泉中学校（1993）「帰国子女と一般生の相互交流を柱とした帰国子女教育の方法」

おかむら　いくこ／お茶の水女子大学大学院博士後期課程　人間文化創成科学研究科比較社会文化学

okamura1231@aol.com